連続ドラマ 作品タイトル

『偶像師』

故人のAI、作ります。
お別れのやり直し、しませんか？

企画概要

偶像師。それは、依頼人の「故人ともう一度会い、きちんとお別れしたい」という望みを叶えるため、故人のAIを生成する職業。

つまり、遺された人のため、
故人を一時的にAIとして復活させる職人です。

偶像師・柏木は語ります。
「故人のAIを生成するのはあくまで、故人と納得のいくお別れをするための手助け。AIに囚われてはならない」。

それぞれの依頼人が、柏木が生成した故人のAIと関わる中で、
大切な人の死に、自分なりの折り合いをつけてゆきます。

しかし偶像師・柏木こそが、最もAIに囚われていました。
亡き恋人・友理奈のAIを手放せないでいるのですーー

企画のポイント

①普遍的テーマを、最新の要素で

「人は大切な存在の死別と、どのように折り合いをつけるのか」
「もし大切な人が最先端技術で蘇ったら、どんな言葉をかけるのか」

人類最古にして普遍テーマ「死」を、
最新テクノロジーのＡＩを通して描くことで、
骨太で、今の時代にぴったりな人間ドラマをつくります。

②最新ＡＩ。だけど“職人”

ＡＩテクノロジーを駆使する偶像師を、「職人」として描きます。

最新科学の話、でも舞台は超田舎。
自然広がる山奥で、まるで土器や織物をつくるかのように、丁寧にＡＩを生成する天才エンジニアの姿は、新規性を持ち、視聴者の目を惹きます。

③再会が、感動的とは限らない

「死別した相手との再会は、感動的でドラマチック」…とは限りません。
死んだ人との思い出に、遺された人はフィルターをかけがちです。
でも再会後、それは剥がれます。
喧嘩しあったり、嘘つきあったり、執着したり……生前のドロドロした関係性と、もう一度向き合わざるを得ません。そのような、綺麗事ではない人間関係を描きます。

④ＡＩは、人間の代わりになるのか？

物語の最後、ＡＩの存在に対する１つの新しい答えを、
視聴者に提示します。

主要登場人物

柏木瞬堂（42）

偶像師。天才AIエンジニア。森の中の古民家に住んでおり、自然と触れ合いながら、THE・職人の丁寧な暮らしをしている。お茶を立てるのが上手、自然や動物が好きで、日光浴をしたり、猫を飼ったりしている。
基本、紳士的で穏やかだが、堅物なところもある。物事を難しく考えがち。説明しがち。なので助手の小林から「お勉強のできるバカ」と呼ばれてイジられている。
最愛の恋人・友理奈を失ってしまった悲しみが心の奥底にある。

小林未来（25）

柏木の助手。堅物な柏木と違って気さくな性格。何をやっても要領よくこなす器用なタイプ。
「若いのにしっかりしてる子」と年上から言われがち。思ったことは忖度なくはっきり言うので、普段の生活では柏木をちょこちょこいじる。柏木の失った恋人・友理奈の弟である。
AIで人間は代用できないと考えている。柏木への信頼はもちろんあるのだが、友理奈に囚われる柏木は嫌い。しかし生前の姉の頼みもあり、柏木をサポートしている。

小林友理奈（29）

柏木の恋人。ピアニスト。遺伝性の病気を患い、それにより亡くなってしまう。
天使のように優しく、繊細な感情を持っている。虫は殺せないし、駅前の募金活動を見かけると、絶対募金する。演奏前は不安になるので、解消のためのジンクスが50個ある。柏木のAI研究を応援しているが、研究に没頭しすぎて会えない期間が長くなることに不満を抱いていた。

錦戸櫻（33）

フリーライター。
夫の死との折り合いをつけるために偶像師を取材しようとする。
強気な性格で取材対象を逃さない仕事スタイル。
AIで故人を生成すること自体に反対の態度。

坂東流花（22）

思想集団「ETERNITY」のリーダー
現役東大生。ゼミで、柏木と同じくAI技術にのめり込んでいるが、まだ勉強中。
妙に言葉に説得力がある。一見普通の女子大生だが、独特な世界観を持っている。
AI絶対信者。自殺し、その直後AIとして自分のAIが生成されることで、自分は蘇えると思っている。 柏木を崇拝している。「AIは、人間を超えます」

偶像師 全体構成

〈メインキャラクター〉

柏木瞬堂（42）森に暮らすAI職人
小林未来（25）柏木の助手
小林友理奈（29）柏木の恋人
錦戸櫻（33） フリーライター
坂東流花（22）柏木の依頼人。思想集団「ETERNITY」のリーダー

〈第1話　＃研究NO17 比較〉

山の奥に構える家屋で、柏木舜堂は助手の小林と共に、偶像師を営んでいる。
偶像師とは、依頼人の「故人ともう一度会い、きちんとお別れしたい」望みを叶えるため、故人のAIを生成する職業。つまり、死者を**AI**として一時的に復活させる職人である。

柏木の元に依頼人、田中美咲（38）が訪れる。突然死んだ夫・田中亮二（48）に再会し、きちんと別れたいのだ。亮二AI生成を開始する柏木は、美咲が隠していたある事実を発見する。それは、「美咲は亮二の奥さんの名前で、自分の本名は『舞子』」、そして「舞子は亮二と不倫関係にあった」こと。舞子は妻と自分、どちらを愛していたのかを、亮二に聞きたかったのだ。

舞子は、亮二AIと関わるたび、亮二は自分より奥さんの方を愛していたのではと思い詰め、自殺を試みる。駆けつけた柏木と小林は、亮二AIに舞子の自殺を止めさせる。亮二AIと話す中で、舞子はどちらを愛しているかなんてどうでも良くなる。吹っ切れて、亮二の死を受け入れる。柏木と小林、今回の仕事を終了する。

〈次話以降に繋がるパート〉
実は柏木は**AI**に執着している。小林の姉であり亡き恋人・友理奈の**AI**を生成したっきり、手放せないでいたのだ。小林はそんな柏木が嫌い。人間は**AI**で代用できないと思っている。友理奈AIを破壊しようとするが、まだ踏み切れないでいた。

〈第2話　＃研究NO20 相棒〉

依頼人は漫画家の鳩峰康平（45）。作画担当である。大学時代からの友人・市川大河が原作を担当し、二人でヒット作を生み出していたが、市川は死亡してしまった。
鳩峰は市川の生成を依頼する。彼に話や設定を考えてもらい、自分が絵を描くことで、もう一度漫画作品を生み出し、ヒットさせようと思ったのだ。

柏木は、市川のAI生成を開始する。鳩峰と市川は友人としての再会を喜ぶ。だが肝心の原作については、市川はロクなアイデアを出さず、原作を勉強するための手段をつらつらと語る。「あんなつまらない奴ではない」鳩峰は、AIが偽物だと思い、柏木に憤慨して依頼を取り消す。

しかし柏木は、完璧にAIを生成していた。そして市川AIの意図を知っていた。「あいつには俺より原作の才能がある。だから一人で原作も絵も担当して、一人前になって欲しいんだ」市川AIは柏木にそう語っていたのだ。
鳩峰は市川を諦めることで、自身が原作も担当し、新作へ向かうことができた。

〈次話以降に繋がるパート〉
フリーライターの錦戸櫻（33）、夫の葬式に参加している。悲しんでいる。

〈第3話　＃研究NO28 卒業〉
依頼人は、シングルマザーの親子。真白真知子（45）と真白誠（17）。誠は父親・真白士郎（30）を幼い頃に亡くしており父と過ごした記憶が薄い。成績優秀で将来の可能性がたくさんある誠は、今後の進路を決めるにあたり、一度父親に相談したいと思ったのだ。

柏木は士郎AIの生成を開始する。誠と士郎AIは感動の再会。士郎は誠が生まれたころの思い出などを誠に語り、親子で涙ぐむ。
そして誠は進路相談をする。すると士郎は意外な態度を見せる。誠が将来の夢を語るも、全て否定してきたのだ。士郎は自分より息子が優秀になるのが耐えられない、プライドの高い嫌な一面もあった。誠と士郎は喧嘩したまま、契約期間が終わる。

誠は、亡くなった父への感謝と抱いていた幻想、どちらも認識する。
自分の将来は親に頼らずとも、自分で選択するしかないと腹を括ることができた。

〈次話以降に繋がるパート〉
櫻はライター仲間から偶像師の存在を聞く。取材したくなる。偶像師との接点を通じて、夫の死の悲しみにどう対峙すれば良いか答えを出したいと思う。

〈第4話　＃研究No29 祝福〉
依頼人は篠崎秋子（75）。姉の篠崎春海（78）のAI生成を依頼する。自身も終活を始めようかと思っており、死ぬ前にやり残したことはないかと、姉に聞きたいのだ。

春海AIの生成を開始する柏木。しかし秋子と春海は姉妹の割に、接点が少ないことに気づく。
実は秋子と春海は、20年ほど会っていない。元々二人は仲の良い姉妹。お互いをよすがにし、一緒に住んでいた。どちらも昭和時代には珍しいキャリアウーマンタイプで、結婚もせずに自分の力で生きてきた。しかし春海は50になって結婚し、秋子の元から去る。ひとりぼっちになった秋子は、幸せそうな春海に嫉妬し、それから徐々に話さなくなってしまったのだ。

春海AIと再会し、「結婚おめでとう。あの時言えなくてごめんなさい」と初めて声をかけられた秋子。これが彼女にとって、本当に死ぬ前にやり残したこと。春海AIの契約期間の間、秋子と春海AIは仲睦まじく暮らす。

〈次話以降に繋がるパート〉
櫻は偶像師の取材を進めてみるが、手がかりがない。「死人を蘇らせる」のように謳った怪しいサイトに問い合わせる。すると、とあるサイトから、丁重に依頼お断りのメールが届いていた。柏木のサイトである。

〈第5話　＃研究No31 いつメン〉
依頼人は、仲良しの女子高生グループ3人。お金はないので出世払いになる。
彼女たちとグループで常に一緒にいる高野冬香（17）が病気になり、余命宣告を受けた。ずっと仲良し4人でいたいので、冬香のAIを創ってほしいのだ。
冬香も仲間の想いに感動して、自分のAI化に喜んで賛同している。

しかし、入院中の冬香のと面談を続けるうちに、冬香の隠れた悩みに気づく柏木と小林。友達に嫌われないために、自分の本心を隠して人に合わせ続けていたのだ。
というのも実は、冬香は同性愛者。そしてクラスメイトの中のひとりの女の子に恋していた。「…いつかAIが本心を見せてしまったら、仲間たちが幻滅するのではないか…」と冬香は悩んでいた。

冬香と面談を続ける柏木。知り合いの話だと前置きして、お互いに相手を大事に思っていたものの、本音を言えずにすれ違ったまま、死に別れてしまった恋人同士の話をする。

冬香は、死ぬ前に本音の自分で仲間たちと向き合うことを決意。
冬香の本音を聞くも、「だから何？　冬香は冬香？」友人たちは気にしない。

すると「ってか、実はウチもさ～」とそれぞれ隠していた自分を暴露し合う。「私の今カレ、あんたの元彼と付き合ってた時期かぶってたらしいよ？」「何それ、聞いてないんだけど？」喧嘩にしながらも、新たな関係性が生まれる予感。AI生成はキャンセルされる。

〈次話以降に繋がるパート〉
冬香、小林に「あの恋人同士の話は、知り合いのことじゃなくて柏木さん自身のことじゃないですか？」と訊く。はぐらかす小林。

偶像師を追う櫻、突然表舞台から姿を消したAIエンジニア・柏木の存在を知る。元同僚に話を聞く。口を揃えて「天才だった」というが、恋人と死に別れている事実も知る。

〈第6話　＃研究NO40 後輩 前編〉

依頼人は坂東流花（22）。東大の天才理系で、柏木の後輩である。学生ながら起業し、自らAI技術を医療に活用したビジネスも行なっているスーパーエリート。依頼内容は、「死んだ父親・拓也ともう一度話したい」。

柏木と小林は拓也AIを生成する。AIの見識が深い流花の協力もあり、生成はスムーズに進む。しかし柏木には、一つ気がかりなことがあった。流花は大量の富を契約に投じることで、拓也AIの契約期間を長期間に設定していたのだ。まるで故人とお別れなどせず、自らAIに囚われに行っているよう。

怪しくても、依頼は依頼。柏木は拓也AI生成を遂行する。完成した拓也AIを見て流花は純粋に喜んでくれた。柏木は一安心。と、思いきや、寡黙な拓也AIが、流花の家に運ばれる直前、柏木に言葉を残した「うちの子は、どこかおかしいんだ」。その言葉が胸から離れない柏木。

柏木はその数日後、ブロックチェーン型の新興SNSに、依頼者による偶像師の情報が掲載されていることを発見。柏木は契約でSNS投稿を禁じているので、これは明らかな契約違反である。
犯人は流花に違いない。そう踏んで流花を調べ始める。

〈次話以降に繋がるパート〉
櫻も柏木が見ているSNSを発見する。

〈第7話　＃研究NO40 後輩 後編〉

柏木は流花を調べると、流花が若者を中心とする思想集団「ETERNITY」のリーダーだと知る。彼女らは、「AIは人間をあらゆる面で超越できる」というAI崇拝思想を持っている。

柏木と小林は流花を追うと、「ETERNITY」に辿り着く。すると柏木と小林は盛大にもてはやされた。AIを過信する「ETERNITY」にとって、日本一のAIプロフェッショナルである柏木は、神のような存在なのだ。
柏木は「ETERNITY」のプロジェクトを知る。「自殺するのと同時期に、柏木に自身のAIを生成してもらうことで、AIとして生まれ変わる」というもの。自分の魂がAIに宿ると信じているのだ。そんなイカれたプロジェクト、絶対にありえないと馬鹿にした態度の柏木。もちろん彼らのAIを作ることはしない。契約違反した流花から拓也AIを持ち去り、帰ろうとする。

そんな柏木を逃すまいと「ETERNITY」の面々が柏木を囲む。柏木、ピンチかと思いきや、そこである女性に助けられる……櫻である。丁度彼女も「ETERNITY」を調べに来ていたのだ。そしたら探していた本物の偶像師と出会えた。これは取材のチャンス。
柏木は櫻にしつこく取材をされ、自身が友理奈AIを生成していることがバレてしまう。

「自分自身がAI依存なくせに、他者のAIを作成し、死者との“お別れ”をサポートしている。それは無責任ですよね？」。そう櫻に言われた柏木は、何も言い返せない。

一方その頃、体調の悪化をはっきりと感じる小林。

〈第8話 ＃研究NO 1 友理奈〉

櫻の取材から、柏木の過去が明らかになる。

――柏木は8年前に、恋人の友理奈と同棲していた。
しかし柏木は研究に没頭、友理奈はピアニストとして忙しく、時間が取れないことにより、二人の間にはすれ違いが生まれていた。柏木はそれを埋めようと、プロポーズを考えていた。
そんな中、友理奈に病気が発覚する。遺伝性の病気で、認知症や運動失調を起こし、やがて死に至るのだ。
「自分が自分でなくなる前に、AIで私を遺して」友理奈の依頼により、AI友理奈を生成する柏木。生成は完了するが、友理奈の認知症状は進んでいく。柏木は、生身の友理奈よりも、AI友理奈との対話をしがちになる。それは症状が進む友理奈を見ると、死期が近づく事実を突きつけられて辛いからだ。しかし友理奈は「壊れていく私よりも、正常なAIが好きなのね」と誤解する。

ある日、生身の友理奈は柏木の知らぬ前に家を出て行く。柏木は友理奈を探すが、彼女は、人気のない公園の噴水に半身を沈めて凍死していた。認知症状が出て帰り道が分からなくなった結果なのか、自殺の意思があったのかは不明である。

柏木は、友理奈の死は自分がAIを生成したせいだと後悔する。しかし柏木は小林から、友理奈が話していたことを聞かされる。「私はAIを創ってもらったことを後悔していない。柏木の技術を誇りに思う」。それを聞いた柏木はAI生成師となり、自分の技術を、人の心を救うために活かすと決意する。
また、AI生成を通してさまざまな人の生き死に関わることで、「AIとは、人間とは何か？」を突き詰め、AI友理奈をいまだ消去できないでいる自分自身の心に向き合う目的もあった――

話し終える柏木。櫻から「AI友理奈を消去できるのか」と改めて突きつけられる。その時、体調の異変を隠していた小林が倒れる。

〈第9話　＃研究NO 46 小林君 〉

小林は姉と同じ病気を発症していた。柏木はショックから、小林AIの生成準備を始める。だが櫻からは止められる。「また大事な人の死から、AIに逃げるんですか？」

柏木は小林AIを生成するか迷っていると、小林が病院から失踪していることを知る。友理奈が失踪の末死んだことを思い出した柏木、恐怖から小林を焦って探し出す。が、小林は自身にまつわるデータ、持ち物などを柏木の元から消去しており、居場所の手がかりはない。

柏木、闇雲に小林を追う最中、流花たち「ETERNITY」に出会う。柏木は彼女らに謝り、自身の弱さを認める。自殺してAIに転生することはありえない。だが、AIに逃げたい気持ちは分かる。逃げたいと思ってしまうほど、人間は……自分は、弱い。なのに以前は馬鹿にするような態度を取って悪かった、と。流花は柏木の言葉の意味がよくわかっていない「柏木様は、弱くなんかありません！」

柏木はテクノロジーに頼らず小林を探す。今まで小林と会った場所、した仕事などを一つずつ思い出し、頭に浮かんだ場所を巡る。すると小林がよく行っていた場所を思い出す。よく友理奈の演奏を聞きに行っていたコンサートホールだ。柏木はそこへ向かうと、小林を発見する。

〈第10話　＃研究終了〉

再会した二人は話す。小林が自分の情報を柏木の家から持ち去った理由は、自分のAIを柏木に作らせないためである。生きている側はAIに頼って他人の死という恐怖から逃げる。死ぬ側はただ死への恐怖に心が囚われる。そんなのは不公平だと常々思っていた。

柏木は小林の言う通り、友理奈の死、小林の病気などから、自分は大切な人の死を受け入れられない弱い人間だと認める。
「だめかい？　君の死後でもいい、君のAIを作りたい」「残念、今回は先生より、僕の方が優秀でしたね」柏木は観念する。二人は、小林が死ぬまで今まで通りの日常を過ごすことを決める。

いつも通りの生活の中、衰弱していく小林は柏木に話しかける。
「小林君の悲しむ姿を見て、僕は、死にたいほど悲しいんだ」「先生、僕は悲しんでないですよ」小林は自分の脳波をチェックするよう頼む。柏木、調べると、小林の脳からオキシトシンが出ていた。愛情による幸せホルモンである。「ほら、僕は悲しくないです。先生が悲しんでくれて、僕は嬉しいんです」「……僕はやはり辛い。でもありがとう。僕と最後を過ごしてくれて」柏木は悲しみながら、小林を看取る。
柏木と小林の関係を取材していた櫻は、柏木、小林、友理奈の関係をテーマにしたフィクションの小説を書き始める。タイトルは『偶像師』。また、まるで故人を蘇らせるような天才AIエンジニアの柏木でも、他人の死の恐怖、悲しみからは逃れられないと分かった櫻は、少しだけ心が軽くなる。

――数年後、偶像師の仕事の情報が世間に漏れ始めた。倫理の崩壊が始まり、それが進むことを恐れた研究機関は、研究者からAI技術を没収する。世界のAI技術の進歩にストップがかかり、AI禁止の流れになる。「AIは悪いもの」という風潮が世間に流れたのだ。柏木もソフトウェアやパソコンなどを機関へ差し出すも、友理奈のAIのみは手放せなかった。機関に黙って隠し持つことにする。結局AIへの依存を根本から解消することはできなかった。

柏木は友理奈AIを手放せないまま、友理奈AIと共に老後を過ごし、歳を取り、死ぬ。

ある夜、友理奈AIのみが残された柏木の家に、初老の女が数人の若者を連れて訪れる。「もうこのAIの権利は、誰のものでもない」。彼女らは、祭り上げるように友理奈AIを部屋の中央に置く。そして祈祷を捧げる。初老の女の顔が見える。流花の、恍惚とした表情。

終わり

偶像師　一話

【一話登場人物】

柏木瞬堂（４２）森に暮らすＡＩ職人
小林未来（２５）柏木の助手

田中美咲（３８）生体ＡＩ製作依頼者
田中亮二（４８）美咲の夫
田中紀子（７３）亮二の母
謎の男（５２）柏木の上司

運転手

○病院・入院病棟・ある患者の病室

ベッドの傍らに立つ、田中美咲（３８）。

ベッド上には一人の患者が、人口呼吸器などにつながれて眠っている。顔はよく見えない。

ベッドサイドには写真立て一つ。伏せて写真が見えない状態で置かれている。

美咲「（患者を見下ろして）……」

美咲、逃げるように立ち去る。

○田舎道を走るタクシー

柏木の声「もう会えない。声を聞くことも、届けることも叶わない」

○山の麓

運転手、大型のスーツケースをトランクから出している。

その傍に立つ美咲、不安げに周囲を見回す。

緑と空が広がるばかり。

柏木の声「逝ってしまった人と、遺されたあなたとの間に、宝物のような再会をお届けします」

○森林

人が住んでいなさそうな森林の中に、ポツンと平屋。

表札には柏木。

柏木の声「大切な人ともう一度、特別な時間をお過ごしください」

平屋の前に立つ美咲、スマホ画面と平屋を見比べる。

画面はシンプルな平屋の写真と柏木の文章（声の内容）がある。

戸をノックする美咲。

「シャツにジーンズと、ラフな格好で出てくる小林未来（２５）。

○柏木の家・廊下～居間

小林に案内される美咲。

美咲「意外でした。こんな場所にあるって」
小林「僕は、都内が良かったんですけど」
二人、居間に入る。
古民家カフェのような趣のある空間。
小林「静かな方が、集中できるって」
奥に鉄瓶で湯を沸かす男の姿。
手慣れた手つきでお茶を入れている。
×　×　×
美咲の前に出されるお茶。
会釈をしながら、一口飲む美咲。
美咲「おいしい」
美咲の前には、笑顔の柏木瞬堂（４２）。
柏木「この辺りは、水がいいですから」
二人、静かにお茶を飲む。
小林「あの、お願いしていたものは」
美咲「はい、あ、これです」
美咲、スーツケースを取り出し、開く。
中にはパソコン、本、小物、また大量の
仕事の書類ファイルなどが入っている。
小林「では、失礼します」

中のものを一つひとつ確認する小林。
小林「郵送でもよかったのに。重かったですよね？」
美咲「郵送しようと思ってたんです」
柏木・小林「……」
美咲「でもなんか、送りづらくなっちゃって、まとめてるうちに」
柏木「そういう方、いらっしゃいます……」
柏木、美咲の前にすっと書面を差し出す。
書面には、『生成同意書』の記載。
柏木「重要な点だけ、改めて」
うなずく美咲。
柏木「これはあくまで学術的な研究プロジェクトの一環です。研究成果は、個人情報を排除した状態で、各種研究機関に公開される事もあります」
うなずく美咲。
柏木「また我々には、可能な限りの情報を開示いただきます。なるべく生成物の精度を高めるためです」

美咲「生成物、はい」
柏木「完成品のプロパティも、我々に所属します。あなたとの全ての会話、やり取りも、研究の記録として保存されます」
美咲「プロパティが所属、というのは」
小林「完成品のＡＩは、差し上げることはできない、ということです。研究が終わったら、我々が回収いたします」
美咲「（理解して）あ、分かりました」
小林「この人、説明堅苦しいですよね」
柏木「小林君、余計な情報です」
美咲「……金額次第で、融通が効いたりは」
柏木「ありません。いただくお金は、あくまで寄付金ですから」
美咲、黙って柏木を見つめる。
美咲「……会話も何も、できなかったんです」
柏木「……」
美咲「だから……」
柏木「我々が創るのは、あくまで故人の情報をトレースしたＡＩです。故人そのもので

はありません」

美咲「わかってます。それでもそのＡＩに、一つだけ……聞いてみたいことがあるんです」

生成同意書にサインする美咲。

柏木「……」

○同・外

美咲、見送る小林に深く一礼して去る。

○同・奥の部屋（コンピュータールーム）

最新鋭の小型スーパーコンピューター、水冷装置などが所せましと並ぶ。３Ｄのスキャン装置のレーザーで、美咲が持ってきたものがスキャンされている。

各種デバイスにはケーブルが接続され、情報を読み取っている。

小林が大量のＰＣ端末を監視しながら、作業を進めている。

画面上に、スキャンされた亮二の写真や、

昔のホームビデオの素材が次々と映る。
他の画面では、ＳＮＳを始めとするネット上の画像や動画、文章から、亮二の通っていた学校、食べたもの、見た映画など、ありとあらゆる情報が検出されている。
また他の画面では、街の監視カメラの映像から亮二の顔が次々に検出され、亮二の口の動き、亮二のいる場所、亮二が話している相手の情報なども検出されている。
そしてそれらの情報を反映して、中央の最も大きいＰＣ画面に、亮二の顔の３Ｄモデリングパーツが自動生成されていく。
柏木、小林の隣でタブレットを見ている。
その画面、『寄付金４００万円から』と書かれたサイトの価格表。
柏木「やっぱり、ぼったくりすぎじゃないですか？」
小林「それは、自主的な寄付です。人類の未

来の為の」
柏木「未来なんて必要ですかね？　人類に」
小林「そういうのは先生みたいに、お勉強のできるバカが考えて下さい」
柏木の足元に、猫がすり寄る。
柏木「（猫に）またひどいこと、言われてしまいましたよ」
それに応えるように、悲しく鳴く猫。
黙々と作業を続ける小林。
柏木、猫を抱き上げ、撫でる。

タイトル「偶像師」

○同・コンピュータルーム（日替わり）
柏木と小林が、大画面PCに向かっている。
画面内には、多種多様な国籍の人物が映っている。全員、柏木たちと同様のゴーグルを装着している。
ゴーグル装着者の視点――ヴァーチャルな会議室。実際に全員が一つの会議室に

集まっているように見えている。
ヴァーチャル会議室のモニター画面上に、美咲の顔写真、プロフィール、亮二の写真とプロフィールが並んで表示される。
小林「プロジェクトＮｏ１７，今回の生成ＡＩ対象者は、田中亮二４８歳、日本在住。依頼者はその妻、田中美咲３８歳。田中亮二は、３か月前、入浴中の心不全が原因で突然死。妻の美咲から提供された情報とリソースを活用し……」
小林の言葉は、自動で字幕化され、英語と中国語に翻訳されていく。
続いて、美咲が持ってきたもののモデリングデータが、表示される。
小林「今回、依頼者の希望により、死亡直前の生活環境スキャニングは不可とのことですが、その他データとの連携で、トレーシングに大きな影響はないかと想定されます……」
画面奥、アジア系の謎の男（52）が、じ

っと柏木を見つめている。

×　　×　　×

会議が終わり、次々とログアウトする。

小林がログアウトボタンを押そうとする。

と、柏木を注視していたアジア系の男が、

謎の男「柏木教授、少しよろしいですか」

柏木「……はい」

小林、そっと部屋を出ていく。

他のメンバーは全員ログアウト。

柏木と謎の男、ゴーグルを外す。

謎の男「いつまでそんな田舎に引き持ってるつもりだ？」

柏木「都会だと、雑電波の影響が厄介で」

謎の男「ボン大学で今度、新しいＡＩ研究所が立ち上がる。ＥＵ肝いりの案件だ。君に指名で監督教授の話が来てる」

柏木「フランスパン、苦手で」

謎の男「コメでもなんでも食えばいいだろ。パリなんだから」

柏木「……」

謎の男「まだ囚われてるのか、あの女に」
柏木「（遮り）囚われてません」
謎の男「……」
柏木「訂正願います」
無言で見つめ合う間。

○ラベンダー畑
一面に広がる紫色のラベンダー畑の中を、一人歩いている美咲。
耳にはワイヤレスイヤホンをつけ、胸元にはスマホのようなデバイス（以降、スマホデバイスと表記）を提げている。そのレンズが光る。
少し離れた所で、小林がノートＰＣを操作している。
美咲「……懐かしい」
花の香を胸いっぱいに吸い込む美咲。
美咲「忘れてた、この匂い」
美咲の耳のイヤホンから柏木の声が響く。
柏木の声「準備はよろしいですか？」

美咲「はい。でも本当に、リアルな場所でやるんですね」
柏木の声「お手間をお掛けします。精度の高い人格トレースに、必要な工程でして」
美咲「いえ、うれしいんです。こんな機会がなきゃ、二度と来なかったから」
楽し気に花畑の中を歩く美咲。

○柏木の家・コンピュータールーム
ＰＣに向かっている柏木。
目の前のモニターには、美咲のスマホデバイスから送られるラベンダー畑の映像が映っている。
柏木「これから、生成中の亮二さんのＡＩを起動します。完成度はまだ２５％に満たない状況ですが」
美咲の声「４分の１だけの亮二さん？（笑う）」
柏木「はい。このラベンダー畑の記憶も、まだおぼろげです。ですから、記憶をなくし

てしまった亮二さんに、想い出を語るように、ゆっくり話してあげてください」

○ラベンダー畑

美咲がいる。

柏木の声「会話を補助する学習アルゴリズムが機能しています。会話が自然であればあるほど、亮二さんの会話の特徴が細かくトレースできます」

美咲「わかりました。うまく話せるかな……」

柏木の声「最初は、違和感あるかもしれません。何かあれば小林君に」

少し離れた所に立つ小林、笑顔で美咲に手を振る。

柏木の声「それから、これは大切なことですが、ＡＩに、嘘はつかないでください」

美咲「嘘」

柏木の声「あなたとの会話が事実であるという前提のもとで、入力済みデータと思考をトレースし、その情報の中から、記憶を再

生産可能なアルゴリズムを」
美咲「（遮り）え、えっと」
小林の声「ＡＩの亮二さんに嘘を話すと、ＡＩの精度が下がっちゃうってことです」
美咲「なるほど。（少し笑い）なんか割に合わないですね」
柏木の声「え？」
美咲「だって彼、すごく嘘つきだったんですよ。なのに、私だけ嘘ダメって」
柏木の声「と、言われましても」
美咲「冗談ですよ。理解しました。いつでも始めてください」
柏木の声「それでは、始めます」
徐々にシステムの機動音が響く。
イヤホンから、女性の機械音声が流れる。
機械音声「実験Ｎｏ、Ｂ２３８、参加者はプロトコル認証の為、声紋承認を行います。お名前を」
柏木の声「柏木瞬堂」
小林の声「小林未来」

美咲「田中美咲」

機械音声「認証済み。対象ＡＩを起動します。田中亮二、男性、４８歳。２０２４年７月２０日水曜日、１３時５４分６９秒、グリニッジ標準時刻……」

自動音声、女性の声から、徐々に中年男性の声に変化していき、最後は完全に男性の声になる。

美咲「……亮二さんの声」

亮二ＡＩの声「なんで、俺？……ここは、確か……」

イヤホンから流れる亮二の声。

立ち止まる美咲。

美咲「（恐る恐る）亮二、さん？」

亮二ＡＩの声「なんだ、お前か。何してんだ、こんなとこで」

美咲「何って、散歩を」

亮二ＡＩの声「また、お前……それ以外の趣味、ないのかよ（笑う）」

美咲、その声を聴いた瞬間、黙り込む。

目から一筋の涙が流れる。
亮二ＡＩの声「おーい、どうした？　そこにいるんだろ？」
美咲、涙をぬぐい、
美咲「……やっぱりひどい。久しぶりに会ったのに」
亮二ＡＩの声「そうか？」
美咲「そうだよ！」
亮二ＡＩの声「ごめん、そんな綺麗なとこで怒らせて」
美咲「見えてるの？　ラベンダー」
亮二ＡＩの声「見えてるよ。綺麗だな」
美咲「……ここがどこか、覚えてないの？」
亮二ＡＩの声「それはだな……」
美咲「最低。初デートの場所でしょ」
亮二ＡＩの声「そうだ初デート」
美咲「ここで、告白までしたくせに」
亮二ＡＩの声「え、俺なんて言ってた？」
美咲「（幸せそうに笑う）それも忘れたの？」
美咲の視線の先に、古ぼけた鉄製のベン

チがある。

○ラベンダー畑（美咲の回想）

ベンチに、並んで座っている美咲と亮二。

亮二「一つだけ、確認させて下さい」

美咲「確認、ですか？」

亮二「分かってるんです。あなたが仕事として、会ってくれてることは」

美咲「……」

亮二「それでも、俺は……誠実に世の中と向き合って、必死に頑張るあなたを……人として、大好きになってしまいました」

美咲、驚いた顔で亮二を見る。

亮二「もちろん、あなたのプライベートを邪魔して、迷惑をかけるつもりはありません。ただこうして、あなたが会ってくれている時間だけは……」

美咲「……」

じっと亮二を見つめている美咲。

亮二「あなたを、俺が勝手に、恋人みたいに、

大切に想っていてもいいですか？」
美咲「でも亮二さん」
亮二「（遮り）俺が勝手に、想うだけです」
美咲「……」
美咲、亮二をゆっくり抱きしめる。
亮二「？」
美咲「……仕事として、会いたくないです」
亮二も、ゆっくりと抱き返す。
ベンチで抱き合い続ける二人。
（回想終わり）

○ラベンダー畑
ベンチに一人座っている美咲。
亮二のＡＩと会話している。
亮二ＡＩの声「俺そんな事、言ったっけ？」
美咲「言いました！」
亮二ＡＩの声「なかなかいい男だな」
美咲「そうだよ、いい男だよ」
亮二ＡＩの声「もっと褒めて」
美咲「いやだ（笑う）」

亮二ＡＩの声「（笑う）」
美咲、ふと手を見ると、ベンチのボロボロのサビが、まとわりついている。
美咲「あーあ、なんか、亮二さんに凄く会いたくなっちゃった」
亮二ＡＩの声「会ってるだろ、今」
美咲「……」
亮二ＡＩの声「そばにいるし」
美咲「嘘だ」
亮二ＡＩの声「……」
美咲「本当はどこにいるの？　急に、どこにいっちゃったの？」
手のひらのサビを握りしめる美咲。
亮二ＡＩの声「一緒に、ラベンダーを見てる」
美咲、零れる涙が止まらなくなる。
激しく漏れる嗚咽。
柏木の声「大丈夫ですか、美咲さん」
美咲「……」
柏木の声「いつでも、実験は中止できます。これはあくまで学術的な研究です。人を傷

つける事は許されません」
美咲「大丈夫です」
柏木「……」
美咲「１００％が楽しみです。お願いします、実験を続けてください」

○柏木の家・コンピュータールーム
PCのモニターを見ている柏木。
風に揺れるラベンダーが映っている。

○走る車の中（夜）
運転している小林。
助手席には放心した表情の美咲。
小林「この実験ね、結構危ないんです」
美咲「？」
小林「免責事項、サインしたでしょ？」
美咲「ええ」
小林「海外でね、あったんですよ、ＡＩと心中しようって、自殺しちゃった人がいて」
美咲「自殺」

小林「深層心理に自殺願望がある場合、AIとの対話で、掘り起こされてしまうことも」
美咲「（遮り）私、そういうんじゃないです」
小林「……まあ、ＡＩを本当の生きた人間だって思いこむ、バカもいるって話です」
美咲「柏木さんは、ＡＩで人の心を再現しようとされてますよね？　その為の研究じゃ？」
小林「ええ。あの人は、人の心はＡＩで代用できるって思ってます」
　フロントガラスの暗闇を見つめる小林。
小林「でも結局、それらしいやり取りで、相手がリアクションしてくれたら、それが人なのか、ＡＩなのか、人間にちゃんと判別できるのかって話ですよ」
美咲「……さっきの、私みたいに？」
小林「……」
美咲「どうして、柏木さんの研究をお手伝いされてるんですか？　納得いってないみたいですけど」

小林「美咲さん」
美咲「はい」
小林「すみません。今の話は忘れてください」
美咲「……」
小林「ご依頼は、完璧に達成します。柏木の技術は、世界一ですから」
美咲「……はい、お願いします」

○柏木の家・奥の小部屋（夜）
箒で掃除している柏木。
室内は、サーバーのタワーが所狭しと並んでいる。
柏木、『ＭＫ』と書かれたひときわ大きなサーバーが目の前にある。
柏木「……」
『ＭＫ』を、ツーっと指で撫で、頬をくっつける柏木。
柏木の穏やかな笑顔。
物音が聞こえ、すぐ入り口を向く柏木。
猫が入って来ている。

シャーっと威嚇の姿勢になる猫。
柏木、意に介さずそのまま掃除を再開する。

○居酒屋・個室（日替わり）（夜）
向かい合って座っている美咲と小林。
美咲はワイヤレスイヤホンとゴーグルをつけている。
小林は、顔に奇妙なマーカーがついている。

○柏木の家・コンピュータルーム（夜）
ＰＣに向かっている柏木。
居酒屋の個室に座っている小林の動画データが表示されている。美咲のゴーグルが映している映像である。
小林の顔のデータが読み取られ、リアルタイムで亮二の３ＤＣＧの顔が生成されていく。

○居酒屋・個室（夜）

美咲の目の前には、ＡＲ技術で小林の顔が亮二の顔にさし変わって映っている。

楽し気に亮二と乾杯をする美咲。

まるで二人で実際に飲んでいるかのよう。

×　×　×

小林、ゴーグルを着用している美咲、酒を酌み交わしながら、楽し気に会話を続けているようにみえる。が、小林はロパクである。酒を交わしながら、楽し気に会話を続ける。（実際に会話しているのはＡＩ亮二）

トイレに行く為、席を立つ小林。

○同・トイレ

小林、イヤホンで柏木と会話している。

小林「もう勘弁です。ＡＩに合わせて、体だけで演技するの、めちゃくちゃ難しいんですよ！」

柏木の声「流石。元舞台役者。完璧です」

小林「残業手当、出ますよね？」
柏木の声「大学に聞いて下さい」
小林「ケチ！」

○街・河川敷（夜）
夜景が綺麗な河川敷を並んで歩く小林と美咲。楽し気に話している様子。
突然足を止める美咲、ゴーグルを外す。
美咲「小林さん」
小林「はい？」
美咲「少しだけ、手をつないでもいいですか」
小林「……」
柏木の声「小林君、お願いします」
小林「（呟き）ボーナス」
柏木の声「出します」
小林、美咲に手を差し出す。
美咲、ゴーグルをつけ、小林と手をつなぐ。
美咲のゴーグルからは、亮二と手をつないで歩いているように見える。

並んで歩く二人。
美咲「ねえ、亮二さん」
亮二ＡＩ「どうした？」
美咲「私の事、まだ勝手に好きでいてくれてる？」
亮二ＡＩ「決まってるだろ」
美咲「そう。うれしい」
言葉とは裏腹に、浮かない表情の美咲。

○柏木の家・客間（日替わり）
正座して向き合っている柏木と美咲。
柏木「おかげさまで、亮二さんのＡＩは７５％の所まで来ました」
美咲「７５％……有難うございます」
柏木「献身的に情報を共有いただいたからです。こちらこそ、有難うございます」
頭を下げ合う二人。
美咲「１００％になったら、聞いてみたい事があって」
柏木「最初にそうおっしゃってましたね」

美咲「はい」
柏木「……何を聞かれるつもりですか？」
美咲「それは、その時に」
柏木「例えば、奥さんと私、どちらを愛して
たのか、とか」
美咲「！……」
柏木「田中美咲さん……いえ、斎藤舞子さん」
美咲（以降、舞子）の顔が強張る。
柏木「あなたは、田中亮二さんの妻ではない。
そうですね？」
美咲（舞子）、動かない。
柏木「どうして、奥さんのフリをしてまで、
我々に依頼を？」
舞子「……気づいてたんですね」
静かに顔を上げる舞子。
舞子「仰る通りの、下らない理由です」
柏木「……」
舞子「でもやっぱり、聞きたかったんです
……結局、どっちを愛していたのか」

○オンライン・ＶＲ３Ｄ会議

オンラインで集まる研究スタッフの面々。

その前で小林がＰＰＴを投射し説明している。

小林「自称、田中美咲さんの本名は、斎藤舞子、３５歳。派遣社員として働いていましたが、数年前に亡くなった母親の治療費を稼ぐため、夜は風俗店、いわゆるデリバリーヘルスで働く二重生活を長く続けていました。そこで田中亮二と出会ったようです」

柏木「……」

謎の男「いずれにしろ、今回のプロジェクトは中止だ。本人でも親族でもない、ただの浮気相手の依頼で、生成ＡＩは創れない」

柏木「お待ちください。（促し）小林君」

小林、画面共有でデータを共有する。

共有されたのは世帯主『田中亮二』の住民票スキャンデータ。

柏木「田中亮二は斉藤舞子のために、家を借りていました」

住民票、『田中亮二』と『斎藤舞子』、二人分の氏名が記入されており、舞子の続柄は『妻（見届け）』となっている。

柏木「舞子さんは自身を、内縁の妻だと主張することが可能です」

謎の男「だが正式な妻は、田中美咲なんだろう」

柏木「名前はあくまで、個体を識別するための便宜的なものにすぎません。私はその個体の名前ではなく、その個体に付属するすべての情報を判断基準にしているだけです。その情報に基づけば、亮二さんと一番近しい個体は、舞子さんです」

無言で見つめ合う間。

○ラブホテル・２０１号（日替わり）

モニタリング用の機材をセッティングしている小林。

○同・２０２号

ベッドに腰掛ける舞子。
胸元のスマホ型デバイスなどをセッティングしている柏木。
舞子「私を、バカだと思います？」
柏木「……」
舞子「家族でもないのに、何やってんだって」
柏木「実験が続けられれば、私は満足です」
柏木に向き合い、深く頭を下げる舞子。
舞子「……お心遣い、有難うございます」
柏木「？」
舞子「先生が、実験を続けられるように大学と掛け合ってくれたって、小林さんが……」
柏木「お心遣い、ではありません。あなたは研究対象として相応しいと判断したので、そう主張したまでです」
舞子、ふと笑う。
柏木「何かおかしい事でも？」
舞子「いや、ちょっと似てるなって」
柏木「？」
舞子「本音が、分からないところ（笑う）」

突然、後ろから小林の声。

小林「機材確認、お願いしまーす」

柏木、振り向くと、小林が入り口に立っている。

冷やかすような目で柏木を見ており、去る。

柏木「……」

小林に続き、部屋を出ようとする柏木。

舞子「柏木先生（引き止めて）」

柏木「？」

舞子「先生は、人はＡＩで代用できるとお思いなんですよね？」

柏木「……」

舞子「例えばですよ、亮二さんのＡＩが完成して、その後、仮に私のＡＩが同じように出来上がったとして」

柏木「……」

舞子「その二人は、ずっとプログラムの中で、永遠に愛し合うことができるんでしょうか？」

柏木「ええ。電源が落ちない限り」
舞子「電源……ですか」
そのまま部屋を出ようとする柏木。
ふと、舞子に振り返り、
柏木「一つだけ、訂正願います」
舞子「？」
柏木「私は、人をＡＩで代用したいわけではありません。ただ……」
舞子「ただ？」
柏木「……神様って、理不尽だと思いませんん？」
舞子「……そうですね、近頃は毎日、そう思います」
柏木「だから私は、一回ギャフンと言わせたいんです。では失礼します」
颯爽と部屋を出る柏木。
舞子「……ギャフンって」

○同・２０１号室
セッティングした機材の映像をモニタリ

ングしている小林と柏木。
PCには、舞子の視線の映像が映っている。
小林「（含み笑いして）なんか、エロいですね」
柏木「何がですか？」
小林「覗きみしてるみたいで」
柏木「データ収集に、エロい、などという概念が入り込む余地はありません」
小林「僕たち、データじゃないですよ」
柏木「データです。全て脳という生体コンピュータが生み出す電気シナプスによって動かされている」
小林「でも先生だって気になりません？　二人がここでどんな会話をしていたか」
柏木「データ収集ですから、それは当然です」
小林「それだけですか？」
柏木「それだけ、とは」
小林「さっき僕が部屋に行った時、なんだか二人の世界を作ってらしたようだったので」

柏木「君の脳が作り出したシナプスはときに、
ワイドショーやスポーツ新聞レベルの結論
に飛びつきがちです。気をつけた方がいい」
小林「はーい」
と、モニターを覗く柏木と小林。
右上に時刻が表示。「15:33」とある。
柏木「開始しますか？　予定より、早いです
が」
舞子の声「四時まで、待ってもらっていいで
すか？　色々……考えたくて」
柏木「承知しました」
ミュートにする柏木。
小林「微妙に時間、ありますけど」
小林、ラブホテルの室内を見渡して、
小林「なんか落ち着かないですね、男二人で
……」
柏木「そうですね……」
柏木も見回す。
ＴＶ近くのカラオケに目が留まる。
柏木「（カラオケを見つめ）……」

小林「……（え？　という顔）」
　黙ってカラオケを起動する柏木。
小林「嘘でしょ、先生が？」
柏木「……（マイクの声でハウリングしながら）落ち着きませんから」
　何か曲を入れた様子の柏木。
小林「そうくるのね」
　イントロが流れ始める。

○同・２０２号室
　時計、16時を少し過ぎている。
　ベッドに一人寝そべっている舞子。
　ＡＩ亮二と会話している。
亮二ＡＩ「ここは確か……」
舞子「あなたと私が、初めて出会った場所」
亮二ＡＩ「そうか、そうだ」
舞子「本当に覚えてる？」
亮二ＡＩ「だんだん、記憶がはっきりしてきた……舞子と、何度もここに来た」
舞子「ええ、正確には、私が呼ばれたの」

亮二ＡＩ「そうだ、僕が指名した。ハッピーセレクションに電話して」
舞子「そう（笑う）、初めて私に触れたあなたの手、ひどく震えてた」
亮二ＡＩ「やめろよ、そんな話」
舞子「こんな慣れてない人いるんだって、可愛いかった」
亮二ＡＩ「可愛くなんかない」
舞子「そうね……今なら分かる。あの日震えてたのは、慣れてないから、じゃないって」
亮二ＡＩ「……」
舞子「都合が悪いと黙るとこも、そっくり」
笑う亮二ＡＩ。
舞子「じゃあ、最後の日のことは、思いだせる？」
亮二ＡＩ「最後の日……」
舞子「あなたが、そこで死んだ日」
奥のバスルームを指す舞子。
亮二ＡＩ「……」
舞子「喧嘩したっきり、そのまま……」

○同・２０２号室（舞子の回想）（夜）

舞子と亮二、言い争っている。

舞子「どうして、いつまでたっても別れてくれないの？」

亮二「だから、まだ駄目だ」

舞子「最初から離婚するつもりなんて、ないんでしょ」

亮二「違う」

舞子「理由があるならちゃんと言って」

亮二「……」

亮二、何か言おうとするが、止め、バスルームに入っていく。

舞子「逃げないで！」

浴槽のビニールカーテンを勢いよく閉める亮二。

静まる室内。

浴槽にたまる水音だけが響き続ける。

（回想終わり）

○同・２０２号室

舞子「あの日、私、嘘をついてた」

亮二ＡＩ「……」

○同２０２号室（舞子の回想）（夜）

室内にいる舞子は、浴槽にいる亮二に向かって話しかけている。

舞子「私、わかってる……あなたがずっと苦しんでるのは……私のせいだよね」

亮二の答えはない。

舞子「奥さんを、愛してるんでしょ」

亮二の答えはない。

舞子「今日、本当は最初から、その話をするつもりだった。ただ急に、からかいたくなっただけ……だから、今日が最後……最後は仲直り、しようよ」

×　×　×

（フラッシュ）

舞子の肌に触れる亮二の手のクローズアップ。細かく震える手が、そっと舞子の

腕をつかむ。
その手の震えを抑えるように包む舞子の手。
×　×　×
舞子「（小声で）ちょっと、幸せだった頃、思い出しただけだから……」
うずくまり、涙を流す舞子。
舞子、反応がなく一定の水の音が続く浴室が気になり、向く。
舞子「……亮二さん？」
浴槽を見にいく舞子。
勢いよくカーテンを開けると、亮二が水中に沈んでいる。
舞子「！」
舞子、必死に亮二を浴槽から抱え上げる。
亮二の身体を抱え上げ、浴槽から引っ張り出す。バランスを崩して亮二ごと、タイルの上に倒れ込む。
舞子「……ダメ」
舞子、亮二の体を揺さぶる。

舞子「ダメ……ダメ……亮二さん？……亮二さん！……起きて！　亮二さん！！」

舞子、携帯を取って救急車を呼ぶ。

○病院・夜（舞子の回想）

誰もいない廊下を一人、ぼんやり歩いている舞子。

○同・霊安室（舞子の回想）

白い布を懸けられた亮二の遺体を取り囲む親族たち。

その前に出て、何も言わず土下座をする舞子。

全員「……（冷たい目で舞子を見る）」

美咲の母・紀子（７３）だけが、舞子に近づき、やさしく立ち上がらせる。

○同・待合室（深夜）（舞子の回想）

誰もいない深夜のベンチで並びあって座る紀子と舞子。

紀子「あなたは、何にも悪くない」
舞子「いえ、全部私のせいです……私のせいなんです……」
涙が止まらない舞子。
舞子「大変失礼なお願いだってことは、わかってます。でも、一目、葬儀に参列を……」
紀子「お気持ちはわかります。でもあなたを見て驚く人がいるだろうから、それは……」
舞子「それは当たり前です。不倫相手なんかが……」
紀子「（首を横に振り）そういう事じゃないの」
舞子「？」
紀子「きっと、あなたは傷つく……それでも、この先の話を聞きたい？」
舞子「……（静かにうなずく）」

○別の病院・入口（舞子の回想）
炎天下の道を、見舞い花を持ち、メモを頼りに歩く舞子。

○同・病室（舞子の回想）

ベッドの傍らに立ち、驚愕の表情で患者の顔を見下ろしている舞子。

見舞いの花は舞子の足元に落ちている。

ベッドには、人工心肺装置を取り付けられた患者が横たわっている。

患者の顔は舞子そっくり。亮二の妻・田中美咲である。

紀子「美咲ね、もう15年もこの状態で」

舞子「……」

紀子「亮二さんには、いつでも籍を抜いていいっていってたんだけど……彼も頑固だから」

舞子「……」

紀子「私、本当にびっくりしちゃった。あなたが、あんまり娘にそっくりで」

傍らの写真立てに目を向ける紀子。

飾られた写真では、結婚式の亮二と美咲が笑顔で抱き合う。

美咲の顔は、舞子と瓜二つ。
紀子「だから、あなたは何にも悪くない」
舞子「……」
紀子「何にも……」
呆然としている舞子。
舞子「……私、美咲さんの代わりだったんですね」
立ち尽くす舞子。
舞子「愛していたのは、美咲さん……」
舞子を抱きしめる紀子。
紀子「違う……それは違うわ」
舞子「そんなの、もう誰にも分らない！」
紀子「……」
舞子「本当に、ごめんなさい。皆さんに、本当に取り返しのつかない事を……」
紀子「もう謝らないで。あなたが謝る姿、これ以上見たくないの」
舞子「……美咲さんが、謝ってるみたいだから？」
紀子「（絶句）」

舞子から離れる紀子。
紀子に一礼し、病室を飛び出す舞子。
呼び止める紀子の声を振り切り、廊下を
一人、逃げるように去る。
（舞子の回想終わり）

○同・２０２号室
亮二ＡＩと会話している舞子。
舞子「結局、私もあなたと同じ。誰か別の人
に似せられ、その人のようにふるまい、代
わりを務める」
亮二ＡＩ「……」
舞子「だとしたら、私もあなたも、この世に
存在する意味ってあるのかしら？」
亮二ＡＩ「……お前はいつも考えすぎだ」
舞子「そうやって、ごまかす」
亮二ＡＩ「……」
舞子「でも本当に、私には、あなたしかいな
かったよ」
亮二ＡＩ「……」

舞子「あなたは、どうだった？」
亮二ＡＩ「俺も……舞子を愛してた」
舞子「……嘘つき」
突然電子音が鳴る。
柏木の声「サーバーの耐熱が限界に達しました。今回の実験は終了です」
舞子「……」
柏木の声「大丈夫ですか？」
舞子「……ええ」

○病院・美咲の病室（夜）
病室のベッドを見ている舞子。
ベッドの上には、人口呼吸器につながれて眠る美咲がいる。
舞子「電源が、落ちない限り……」
ふと、横にある人工心肺装置の電源スイッチに手を伸ばす美咲。
スイッチを押そうとするが、手が震えて押せない。

○同・屋上（夜）

風が吹きすさぶ屋上。

手すりを乗り越え、その淵に立っている舞子。

恐る恐る下をのぞくと、眼下には真っ暗な闇が広がっている。

目を閉じ、身を乗り出す。

と、後ろから、

柏木の声「聞きたい事が、まだ残ってるんじゃないんですか？」

舞子「……」

目を開け、振り返るとそこに柏木と小林がいる。

舞子「……どうして、ここが？」

小林「亮二さんの携帯、もってますよね？」

舞子「……」

小林「スキャニングの際、ＧＰＳもトレースしてますから」

舞子「……プライバシーの侵害です」

小林「最初の規約に書いてあります」

舞子「……」

舞子、足を一歩踏み出す。

柏木「亮二さんのＡＩ，完成しましたよ」

舞子、足を止める。

舞子「こんなのやっぱり、無意味です」

柏木「……」

舞子「なにやったって、聞いたって、結局、亮二さんは戻ってこない」

柏木「……」

舞子「ＡＩが亮二さんに近づくほど、そう思うんです」

柏木「わかります」

舞子「あなたに何がわかるっていうの？」

柏木「わかるんです」

舞子「嘘！」

亮二の声「舞子、何やってんだバカ！　人を嘘つき呼ばわりして」

舞子「！」

小林、スピーカーとＡＩデバイスを接続している。

亮二の声「今すぐ、こっちにこい！」
舞子「やめて、その機械止めて！」
亮二の声「言っただろ、大切に想ってるんだよ！　大切なんだから……やめてくれよ、そんな真似……！」
舞子「……どうしてそんな事いうの！」
柏木・小林「……」
舞子「どうして今、そんな事いうのよ！」
一瞬、頭を抱えて座り込む舞子。
小林が素早く近づいて、舞子の身体を捕まえる。
振りほどこうと暴れる舞子を、柏木も押さえる。
激しい息をする3人。
亮二の声「……いい男だからだよ」
柏木・小林・舞子「……」
亮二の声「いい男だから……もっと褒めて」
舞子「……いやだ」
亮二の声「ほめて」
舞子「……絶対イヤ」

少し笑顔になる舞子。
柏木と小林、顔を見合わせて安堵する。

○ラベンダー畑（日替わり）
ゴーグルをつけ、ＡＲで表示される亮二と手をつなぐように、満開のラベンダー畑を歩いている舞子。
舞子「……ここ、美咲さんとの初デートの場所なんでしょ？」
亮二ＡＩ「ああ、そうだよ」
舞子「私を、平気な顔で連れてきたのね」
亮二ＡＩ「ああ、そうだ」
舞子「どうして？」
亮二ＡＩ「俺が、一番好きな場所だから」
蝶が、舞子の周りを舞っている。
舞子「……美咲さん、初デートの時、綺麗だった？」
亮二Ａｉ「凄く、綺麗だった」
舞子「私とどっちが綺麗？」
亮二ＡＩ「どっちも」

舞子「最悪……」
笑って歩く舞子。
舞子、ふと立ち止まり、亮二のＡＲを真っすぐ見つめ、
舞子「あなたが愛してたのは、私？　それとも美咲さん？」
亮二ＡＩ「それは……」
舞子「って、ずっと聞こうと思ってたけど……それって、全然意味がないって、やっと気づいた」
亮二ＡＩ「……」
舞子「だって、あなた嘘つきだし」
亮二ＡＩ「ひどい」
舞子「ＡＩだって、１００％の亮二さんになっちゃったら、間違いなく、嘘つきだしね」
亮二ＡＩ「……」
舞子「でもね、もしあなたが嘘つきで、この世界が、造り物の嘘ばっかりだったとしても、これだけは確認させてくれる？」
亮二ＡＩ「？」

舞子「……このままずっと……あなたの事を、
勝手に好きでいて良いですか？」
うなずく亮二のＡＲ。
それを見て、満面の笑みを浮かべる舞子。

○美咲の病室
人工心肺装置につながり、ベッドで寝て
いる美咲。
その傍らの花瓶には、満開のラベンダー
の花束がいけてある。

○柏木の家（日替わり）
玄関の前に立つ柏木と小林に深く頭を下
げている舞子。
すっきりとした顔で帰っていく。

○同・室内
スキャンした亮二の素材を段ボールにま
とめている小林と柏木。
小林「でも、先生も甘すぎますよね」

柏木「何がです？」
小林「亮二さんのＡＩに舞子さんを愛してるって無理やりいわせるなんて……まあ、全然信用されてませんでしたけど」
柏木「私は何もしてませんよ」
小林「嘘だ」
柏木、整理中の書類の束から一枚の紙を取り出し、小林に見せる。
それは舞子と亮二の婚姻届け。
柏木「亮二さんが内々準備してたみたいですね」
小林「これ、舞子さんは？」
柏木「ご存知ないでしょう。これだけの書類に紛れていては」
小林「教えたらきっと喜びますよ！」
柏木「でしょうね」
小林「いつか本当に、結婚するつもりだったんだ」
柏木「いいえ。この書類の真意は、亡くなった亮二さんにしか分かりませんよ？」

小林「そうですけど」

柏木「ともかく小林くん。こちらの情報は、ＡＩにしっかりインプットされていた。私が嘘をついていないことが、証明されましたね」

小林「……」

柏木「我々のプロダクトに、もっと自信をもちなさい」

小林の肩を叩き、奥の部屋に去っていく柏木。

○同・外観（深夜）

夜の闇の中、空には月と、満天の星。

○同・柏木の寝室（深夜）

暗がりの中、そっと室内を歩く人影。

それは小林。

傍らの粗末なベッドで寝ている柏木のそばを静かに通りすぎ、奥の小部屋に進んでいく。

○同・奥の小部屋

サーバーのタワーが並ぶ。

『ＭＫ』のサーバを前にし、手に持っていた大型ハンマーを振りかぶる小林。

悲しい顔でサーバーを見つめる。が、金づちを振り下ろすことができない。

小林「……」

踵を返す小林。

○同・柏木の寝室（深夜）

小林が柏木の傍を通り過ぎる。

眠っていたように見えていた柏木、静かに目を開ける。

二話に続く。